

他日捲土重來すべき勢を貯ふる所以の者なりと觀測す、此の觀測は、果して杞憂なるか。又蒙古に髣髴たる新疆の形勢は、露領中央亞細亞縱貫鐵道（歐露のサマラより岐分してオレンブルグ、カザリンスク、タシユケンドを経てコーカンドに通ずる者）の完成したるに伴ふて、一層危險に瀕しつゝあり。新疆に於ける露國の政治經濟的優越權は、支那の政變に伴はれて、西藏に對する英露協商の保障に破綻を來たしつゝあり。斯の如き形勢は、意に支那の爲憂ふべき者あるのみならず、印度は、其の西北境邊防と共に、更に東北境に患を重ぬるの杞憂なしとせず、波斯の北部に於て有する露國の政治經濟的優越權は、露國をして永く雌伏せしむる者なりや否や、露國は、果して協約、協商に甘んじて、歴世傳來の信條を拋棄すること猶弊屣を棄つるに等しき果斷ある者なりや否や、如上露國東漸の形勢は、吾人をして自國の爲に憂慮せしめ、隣接せる友邦の爲に悲哀せしめ、同盟國の爲に杞憂せしむる所の者なりとす、是れ等の憂患は、到底優勢なる大陸的威力の準備に頼るにあらざれば、豫防し得べからざる所の者にして、吾人が、將來英國の大陸的領土の國防を、過去及現在の經營施設に放任

し得るや否やを疑懼する所以の者は、實に之が爲なりとす。

今仔細に、露國陸軍近時改革の内容を觀察するに、其の總兵力に至りては、改革以前の者に比して大差なく、唯改革の結果、團隊の編制、全軍を通じて殆んど整一に赴きたるに伴ふて、軍團數に著しき増加を來たし、用兵上得る所の便益か過去の比にあらずと云ふに過ぎず。而して既に陳ぶるが如く、開戰當初に於て過去の戰役に比し、將來極めて有利なる形勢を極東戰場に齎す所以の主因は、主として極東に於ける平時常設兵力の増加、即ち日露戰爭以前には、不完全なる三軍團の兵力を有したるに過ぎざりしに、現時は、完全なる五軍團の兵力を擁するに至りたること、最近外蒙古に對する活動が國際的德義を無視したるの傾向あること、戰時地方的獨立動員可能の準備計畫に勉めつゝあること及西伯利亞鐵道複線の施設に伴ふて、輸送力に著しき發展を來たさんとする事との四條件にあり、是れ等四條件は、曾て日露戰爭當時、露國に禍を及ぼしたる不利なる形勢に一轉機を與ふる所の者にして、就中、後の一二條件の可能性は、露國をして比較的優勢なる兵力を、短日月間に、極東戰場に擁し得べからしむる重大

事件なりとす。詳説すれば、如上の經營は、露國が、歐露に於て有する強大優勢なる常設野戰軍團も、極東の戰場に展開する爲には、延長約八千キロメートル（莫斯科より哈爾濱に至る）に亘れる隘路に等しき西伯利亞鐵道上に於て、一時戰鬪能力に缺加せる無限行軍縱隊に延伸せざるべからざるに伴ふて、兵力上の優勢も、境遇上劣勢に餘議なくせらるゝ弊害の過半を芟除すると同時に、開戰初動の時期に於ても、尙ほ能く極東戰場を支配するに足るべき兵力を準備し得べしむる所の者なりとす。

近時、日露兩國の國交は、日に親厚を加へ、殊に滿洲に於ては、政治的に經濟的に、確定利權を擁護する爲、相互に常に協同の歩調を取り、且彼我利權の尊重主義を恪守して、何等扞格相容れざる者あるにあらざれども、露國の國勢國力展發上自然的必要に基く施設なりとは云へ、上陳四個の新經營は、將來を杞憂する吾人をして、偶々、如上の研究を敢てせざるべからざるに至らしめたり。

露國の海軍再興熱は、近頃頗る盛にして、英、佛の親善、露佛同盟條約内容の一轉機は、一層如上の趨勢に一段の熱を加へしめたるかの傾あり。露國海軍再興

に關して、最近傳聞する所に依れば、千九百十二年（大正元年）十二月、起工したる巡洋戰艦四隻（各々排水量三萬二千五百噸）及千九百十三年（大正二年）、建造命令を下したる巡洋艦四隻、快速巡洋艦八隻、驅逐艦三十六隻、潜水艇十二隻の外、更に千九百十六年より十箇年間に、十五億四千萬留の支出を豫定せりと云ふ、此の計畫案完成の曉に於ける露國婆羅的艦隊の新勢力（在來艦隊を含まず、又黑海艦隊は土耳其の一倍半を標準とし、極東艦隊の編成は未定なりと云ふ）は、實に左の如し。

D 級 戰艦	二十四隻	D 級 巡洋艦	十二隻
快速巡洋艦	二十四隻	驅逐艦	百〇八隻
潜水艇	三十二隻		

要するに、露國が海軍再興に孜々營々たる者あることは、掩ふべからざる事實にして、極東艦隊の再興に就ては、目下具體的計畫案なき者の如きも、過去戰役に於て、婆羅的艦隊の全力を擧げて、極東に派遣し得たる歴史に顧みれば、婆羅的海は、一の製造所たるに過ぎずして、臨時極東海面に游弋場を移轉し得べ

き者なることは、何等疑を夾むの餘地なき所の者なりとす。然れども、極東唯一の軍港而かも恰も日本の領土に依りて包圍せられたるが如き位置にありて、冬季少くも四箇月間、結氷の爲、海面を閉塞せらるゝ浦港は、活動することを要する艦隊の棲息所としては、極めて不利なる形勢の下にあり、此の不利なる形勢が海戰戰略に及ぼす影響は、思ふに將來も亦過去に異なる者之なかるべし。

其五 獨逸

獨逸は千八百七十、七十一年獨佛戰爭の終局に於て、獨逸帝國統一の業を終へたる後、千八百七十八年(明治十一年)頃より、殖民及貿易事業の氣運漸くに民間に萌芽せしも、當時ピスマルク宰相が、海外發展政策に冷淡なりし爲、一時其の發達進歩の機會を逸したり。然るに、自然的に發展せんとする獨逸の商業は、逐年進運に向ひ、將來益々有望の域に赴かんとするの趨勢ありしも、世界到る處に領土を有し、堅確なる根據地を立脚點として、經營せる英國商業の爲壓倒せられ、就中南米、南洋、亞弗利加方面に於ては、動もすれば、其の進運を阻碍せられんとするの傾向ありしかば、獨逸政府は、土地を海外に占めて、根據地を設

備し、立脚點を鞏固ならしむるにあらざれば、經濟的海外發展の成效、得て期すべからざること察知するに至り、爲に千八百八十四年(明治十七年)頃より、海外に新領土を獲得することを以て、國力發展政策の主義方針と爲すに至り、千八百九十四年(明治二十七年)頃より、實に如上政策に一轉機を來たし、殖民貿易事業に對し、大に保護獎勵を加ふるに至れり、之が爲、千八百八十四年より、千八百九十年に至る、約七年間に於て、南洋に於ては、ウイールヘルムランド、ピスマルク群島、ソロモン群島、マルシャル群島等の殖民地を占領し、千八百九十七年(明治三十年)支那に於て膠州灣を、千八百九十九年(明治三十二年)太平洋に於てサモア及カロリン群島を占領するに至り、更に和蘭の海外政策不振に乗じて、西印度に於てキュラサオ群島を、東印度に於てスマトラ島附近に於て貯炭所を得んとするの企圖あることを傳へたるは、近き過去の事に屬す、而して今や、南米に於ける獨逸の經濟的發展は、歐、米列國中第二位にあり。如上の形勢は、茲に大海軍の整備を要し、大海軍整備の計畫に伴ふて、殖民に、貿易に、投資に、海外發展政策上に更に一新氣運を齎すに至り、茲に偶々先づ海上王たる

英國の海外政策と觸接し、動もすれば其の忌諱に觸れんとするの機會に遭遇せり。斯の如き機會を齎す所以の者は、兩々立國の基礎が、漸次に相類似せんとする形勢が馴致したる自然の勢にして、甲國に於ける自然の勢は、乙國に於ける自然の勢と衝突して、相容れざる者あるに至るは、輒近世界列國が、孜々經營しつゝある海外發展政策の波動の觸接が伴ふ所の必然的趨勢なりとす。斯の如き獨逸の海外發展政策は、世界到る處に於て、英國の政策と相衝突するのみならず、南米及南洋に於ては、米國と、亞弗利加に於ては、英、佛兩國と、東洋に於ては、政治的に、經濟的に、世界列強、就中我が帝國の利害と相觸接するに至り、爲に曩には、其の主唱に由りて、我が帝國戰勝當然の獲得物たる遼東半島の領土權を妨碍し、次で自ら膠州灣を占領して、支那領土の一部に蠶食の端を開きたるのみならず、動もすれば我が滿洲に於ける發展政策に中傷を試みんとし、陰然支那の支持者たらんとするの傾向あること、猶米國の陰險なる懷柔政策の如し、東印度に於ける和蘭殖民地の一部に指を染めんとし、且太平洋の海權に地歩を占めんとするが如き企圖は、偶々吾人の注意を喚起して、其の真相を窺はざるを得ざるに至らしめたり。

不幸にして我が帝國が、東洋に於て、獨逸と于戈の間に應接せざるべからざるが如き事件に餘議なくせられたりとして、其の結局は、海戰に於て、決定せらるべき者なることが自然的形勢なれば、予は、以下主として、獨逸が東洋に起りたる重大事件に關し、擧げ得べき海軍力が、果して幾許なるべきかを研究せんとなす。

獨逸は、千八百九十八年(明治三十一年)に於ける海軍擴張案の制定に次で、千九百年(明治三十三年)更に其の勢力を倍加すべき法律を定め、千九百六年(明治三十九年)別に遣外艦隊の追加案を決定し、更に千九百七年、艦齡を二十五年より、二十九年に減縮したる結果、千九百八年より、造艦豫定隻數に、著しき増加を來たし、爲に當時、英國の上下をして、其の國防の危機を叫ばしめたる等、獨逸の急速なる海軍力の増加は、米國の海軍擴張と相並んで、世界海軍國の第二位を競争しつゝあるにあらざるかの感あらしむるに當り、千九百十二年(明治四十五年)更に新海軍案を決定して、戰艦三隻、小巡洋艦二隻の建造、潜水艇の増加、飛

行船の購入及陸軍二個軍團の増設に著手したり。由來獨逸海軍軍備の方針は、世界の海軍最強國と雖、獨逸と戦ふことを冒險なりとして、事前に於て、深く考慮せしむべき程度の海軍力を建設するを主義とし、千八百九十八年、初めて海軍法を制定して以來、爾後幾度かの擴張を見たるが、現在にありては、絶へず、戰艦四十一隻、巡洋戰艦二十隻、小巡洋艦四十隻、驅逐艦百四十四隻、潜水艇七十二隻を常設せんとするにありと云ふ。然るに巴爾幹戰爭の經過が土耳其の戰敗に結局せんとしたる形勢は、獨逸をして陸軍擴張の緊急を感じるに至らしめたる者の如く、而して千九百十三年(大正二年)春頃以來、世界の輿論が信ずる所に依れば、英國對獨逸海軍力維持に關しては、十六對十の比例を以て、英、獨兩國間に默契成立したるかの如く、兩國海軍力維持の程度を推測するに至れり。

抑、獨逸本國の海岸線が、米國の其れに比すれば、極めて短小且單純なるに拘らず、海軍擴張の趨勢が大に米國を凌がんとする者なるかの如きは、實に奇觀に耐へざるも、獨佛戰爭後萌芽したる獨逸の海外政策が、近き十數年間に於て、著しく發展したる事實に顧みるときは、必しも無稽の企畫にあらずして、斯の

如きは主權者が宣唱したるか、將た國民が鼓吹したるか、要するに、國力の海外發展政策は、工業の進歩、商業の發達、人口の増殖及資本の膨脹に伴ふ自然の勢にして、此の政策が果して獨逸將來の國是なりとすれば、獨逸海軍擴張の趨勢は、政策に伴ふ自然至當の必要なりと認めざるべからず。加之此の政策は、十九世紀以降、世界到る處、領土的權利確定したる今日にありては、尋常手段を以てしては、到底成效の望なきのみならず、既定の權利をも保護することを得ざるが如き形勢に顧みれば、國是が要求する所の威力の準備は、當代に缺ぐべからざる唯一無二の手段なりと認めざるべからず。然り而して如上の趨勢は、獨逸をして、斯の如き手段の巧妙なる活用に依りて行ふ傍若無人の行爲をも、威力の前に、世界をして黙せしむるに足り、乘すべき機會あれば、漁夫の利を占めつゝ、全世界を濶歩し得る所以の道なりとの信條を描かしめつゝあるかの感なき能はず。

要するに、孜孜經營せられつゝある獨逸の海軍力は、必要に臨み、東洋に派遣し得べき性質の者なることは、一點の疑を夾むの餘地之なしとす、果して然ら

ば、是れ等海軍力は、東洋に於て起るべき重大事件の爲、果して其の幾許を派遣し得べきか、過去日露戦争の場合に於ける露國海軍の如く、獨逸も亦果して直接沿岸防護に必要な消極的守勢艦艇を除くの外、全力を擧げて東洋に派遣し能ふや否や、又歐洲政局に於ける獨逸の境遇は、日露戦争當時に於ける露國の境遇と同一視し得べきや否や、大陸に於て腹背肉薄せんとするかの形勢にある獨逸の想定敵國は、恰も海面に於ても、兩側より逼迫せんとするかの形勢にあり、加之近くは、北海を隔て、一大海軍國と對峙の姿勢にある獨逸の煩累は、大陸接壤國に對する防備に缺陷なきのみの故を以て、之を避け得べきにあらず、且又別に、獨逸は、曾て日露戦争當時、露國が有せざりし所の者にして、其の保護を海軍力に待たざるべからざる海外殖民地及貿易の進運中にある者あり、故に予は、獨逸の政治當局者が、如何に巧妙なる外交的辣腕を振ひたりとするも、露國海軍の如く、其の主力の全部を擧げて、東航せしめ得るの機會は、歐洲政局に於て、既得利權の多くを犠牲とするの覺悟あるにあらざれば、絶對的に不可能なりと斷言せんとする所の者なり、然るに獨逸の政治當局者は、果して近き確定的領

土權及利權を擲つても、遠き而かも不確定なる目的物に其の全海軍を擧げて、冒險的突進を敢てせんとするの勇氣ある者なりや否や、如上の事情は、日露戦争當時に於ける露國の海軍若くは將來に於ける米國の海軍と、大に其の趣を異にする所以にして、露、獨兩國海軍の遣東海軍兵力を判斷するに、同一條件を以て判斷の基礎と爲さんとするが如きは、理由極めて薄弱なる牽強附會説たるを免れず。加之獨逸の海軍は、東航の途中、亞弗利加の一部沿岸を除くの外、一の準備せられたる避難港、貯炭所をだに有せざるのみならず、獨逸海軍の爲、東洋に於ける唯一の根據地たる膠州灣が、火事場的なる戦争の序幕に於て、我が帝國陸海軍の監視下に於て、如何なる運命に曝露すべきかに想到せば、獨逸の思慮ある政治當局者は、其の海軍をして、妄りに露國海軍の覆轍を踏ましむることを以て、屑とする者にあらざるべし。果して然らば、獨逸が歐洲政局に於ける發言行爲の權利を保留し、本國に遠からざる地域に於ける確定的領土權及利權を確保し、而かも兵力を以て絶對的に東洋事件に干渉せんとするが如きことありとするも、多くも準備兵力の二分の一以上を東航せしむることは、思ふに不可能なるべし。

大正六年(一千九百十七年)度に於ける豫想

艦種	隻數	摘要
戰艦	十五隻	進水後十五年以内の者二分の一
巡洋戰艦	八隻	同前
小巡洋艦	十隻	速力二十五節以上の者二分の一

其六 米 國

千九百三年(明治三十六年)十一月三日、コロンビヤ共和國の一州なりし巴奈馬が、巴奈馬運河問題を動機として獨立を宣言し、共和國を樹立するに當り、同年同月十八日、締結したる地峽運河條約に由りて、巴奈馬の獨立を保障し、且維持するの義務を負ひたるに伴ひ、兩大洋を管制するに便なる、世界無比の要區に於て、政治的優勝權を占め、且又孜孜として大海軍を經營しつゝある米國は、運河の開通を待ち、大西、太平兩洋を其の羽翼として世界に雄飛し、廣義的モンロー主義の意義を列國に説明せんとする所の者にして、其の第一講座は、先づ東

洋に向ふて試みられんとするの傾向なきにあらず、蓋西印度に於てキューバ、ポートルゴを占領して、キリビヤン海に其の根柢を鞏め、布哇、比律賓其他サモア、チュチュイラ、及グアム等樞要なる島嶼に於て、梯次の根據地を有し、且近き將來に於て兩大洋交通の便宜を得んとしつゝある米國は、一層モンロー主義の廣義なる説明に便利なる講壇を準備しつゝあるの觀あるのみならず、太平洋は、米國の對外發展政策の爲、比較的抵抗力微弱なる方面にして、殊に巴奈馬運河の開通は、世界列強利權の角逐場たる支那の沿岸に對し、歐米列強中、一の米國のみをして、最も早く到著し得るの利を獨占せしむるのみならず、實に全太平洋面に對し、先著の獨占權を壟斷せしむる所の者にして、米國は、此の優勝なる形勢の下に、太平洋に於ける海權を掌握せんが爲、雄大なる考案を以て海洋的威力を整備しつゝあり、斯の如き用意周到なる米國の諸準備は、陰然太平洋面に於ける政治的、經濟的及軍事的優勝權を占有し得べき潛勢力を貯存しつゝある者なりと認め得べき理由を、否定し能はざるべければなり。

由來太平洋海權問題は、理想として、先づ米國に依りて呼號せられたる所の

者なりとす、而して事實としての表現は、今や一種の時間問題に過ぎずして、海洋的諸準備完成の曉に於て、太平洋を管制せんとする米國の企圖の如きは、思ふに机上の空論にあらざるべし。若夫れ所謂制海權が、世界の富を管制すと云ふことが果して眞理なりとすれば、將來太平洋に面する陸地の大部分は、米國の市場と化し去り、我が移民は、杜絶せられ、我が貿易は、蹂躪せられ、將來生命の大部分を太平洋に托せざるべからざる運命を有する我が帝國は、致命的危険に曝露するに至らん、果して然らば、我が帝國國民は、斯の如き危険に對して、我が帝國最後の運命を、如何なる種類、如何なる程度の保險に托せんとする者なるか。凡そ獨立國家の政治は、其の名譽權利を擁護し、國利民福を増進するを以て、唯一の目的とすることが、世界共通の原則なりとすれば、列國相互に政治の目的に向ひ、努力して底止する所なくんば、其の波動の輪廓無限に擴張して、遂に最外波動を以て、相觸接し、次で交錯するに至るは理の自然なりとす。是れに由て之を推せば、今や米國が太平洋面に活躍せんとするが如きは、自然の數なると同時に、太平洋の一隅に偏在して、天與の形勝に據れる我が帝國が、新進氣鋭を以て、

太平洋面、就中東洋に於て、政治的原則を標榜し、東洋的モンロー主義を鼓吹し得べき資格の有無を世界に問はんことも、亦當然にして、恰も同一方面に於て、個々に發展せんとする兩國政策の觸接が、偶々利害相容れざる者あるにあらざるかを考慮せざるべからざるに至らしめたる趨勢は、吾人をして轉々傷心に耐へざらしむ。試に見よ、モンロー主義は、輓近米國に於ける海外發展思潮の旺盛と、其の國力の充溢とに由り、帝國主義に適するが如く解釋せられ、外國に對しては、絶對的に亞米利加大陸に於てする利權の獲得占有を許さざらんとするに反して、動もすれば、敢て東洋の政局に過分なる容喙を試み、支那の傀儡師を以て自ら任ぜんとするが如き傲慢なる我田引水的態度を。四國對支那借款問題、滿洲鐵道中立問題の波動の中心は、果して那邊にありしか、又一の誤聞に基きしとは云へ、我が帝國が、墨其哥太平洋岸マダレナ灣に於て、貯炭所を租借せんとする企圖ありとの風聞は、彼の上院をして如何なる議決を爲さしめたるか、又一地方一局部に於ける感情的發作に過ぎずと雖、我が移民排斥問題、兒童入學拒絶問題並に我が移民土地所有權問題の如きは、我が國利國權を侵害汚

辱すること尠しとせず。熟々米國の對外交渉の態度に察するに、其の發言行爲の突飛にして且傍若無人なることは、日英同盟保障の範圍なる東洋局面に對してさへも、猶彼の滿洲鐵道中立問題の如き者あり、然るを況んや、盟邦の強力なる保障なき米大陸、殊に其の領土上に起りたる事件に對する者に於てをや、斯の如き感情の累積は、延ひて反目嫉視の原因となり、一方國に於て、如何に隱忍して國交の緩和を圖らんとするも、利害衝突の極は、遂に干戈に訴ふるにあらざれば、解くべからざるに至らんとするの恐れなしとせず。將來殖民に、貿易に、廣く適良なる土地を求めざるべからざる境遇にある我が帝國は、太平洋に、支那海に、廣大なる範圍に於て、米國と利害の接觸面を有せり、而して米國は、日英同盟が保障する範圍外に於て、我が帝國と、利害の衝突を惹起し易き傾向を有する唯一の國柄なるが故に、其の意味ある海洋的威力の雄大なる經營は、殊に吾人の戒心を促すこと極めて痛切なる者ある所以なりとす。

吾人は、日、米兩國間に國交斷絶するが如き不幸事件に際會することありとするも、大陸軍を以て干戈の間に應接するの機會は、恐らく之を有せざるべし、

何となれば、米國が其の陸軍を東洋に送遣すること、我が帝國が其の陸軍を米大陸に送遣することも、共に無益不利なる企圖に過ぎざればなり。試に見よ、約八萬を下らざる現役正規軍を有し、忽ちにして約十萬を下らざる義勇軍を徵募し得べき米國に對し、我が帝國は、第一會戰を準備する爲、幾許の兵力を輸送し得べきかを。今假りに我が帝國が、太平洋に於ける完全制海權を得たりとし、且同時に五師團を下らざる兵力を遠洋航海の途に就かしめ得べき輸送力、而かも少くも百隻を下らざる大運送船隊（各、四、五千噸を下らざる者）を準備し得るとするも、航程約四千八百海里、少くも往航十五日を要す、而して其の輸送し得べき兵力は、辛ふじて米國の現役正規軍に對抗し得る者に過ぎず、兵器彈藥を除くの外、軍需品の總てを、徵發に依り用を辨じ得る者として、軍隊輸送にのみ全力を注ぐも、第二回輸送團隊の増遣は、一箇月餘の後にあり、假令ひ米國の陸軍は、編制及教育に多少の缺點ありとは云へ、此の間、我が上陸軍は、少數の兵力を以て、而かも純然たる敵地に於て、應急配備の爲少くも三倍を下らざる兵力を準備し得る米國陸軍に對し、能く上陸地附近に於て、其の位置を保持し得べきや

否や。然るを況んや、遠洋航海に堪へ得べき如上大輸送力を有せざる我が帝國は、第一回の輸送に於て、米國現役正規軍に對抗するに足るべき兵力を送遣すること不可能なるに於てをや。又反面より觀察すれば、斯の如き大輸送をして、危険の顧慮なからしむる程度に迄、太平洋の制海權を掌握し得たりとすれば、我が帝國の爲には、既に業に大成効にして、米國の爲には、半致命的の一大打撃たるを免れず、然るに更に敢て陸上遠征を企てんとするが如きは、好奇無謀の舉にあらざるなきか。思ふに米國たる者も、亦斯の如き無益不利の舉を敢てする者にあらざるべし。故に曰く、吾人は、日、米兩國間に國交斷絶することありとするも、米國に對して大陸軍を以て干戈の間に應接せざるべからざる機會を有せざるべしと。

米國造艦計畫の根本的主義が、大戰艦隊の建造にあることは、今復茲に喋々するの必要を認めず、而して其の將來整備の曉に於て達せんとする所の標準は、同國海軍卿の言明に據り極めて明確なりとす。初め米國政府は、年々大戰艦四隻宛の起工を企てたるも、議會の修正に因り、千九百十七年二隻の建造に着手し、

爾後毎年二隻宛を起工して今日に及べり。(千九百十二年に於ては一隻を、千九百十三年に於ては二隻を建造することとせり) 如上建艦標準に關して、曾て海軍卿マイヤー氏は、次の如く言明せり。即ち

米國は、年々二隻の戰鬪艦を新造し、而して常に四十隻の戰鬪艦を有せざるべからず、或る二強國は、是れ以上に標準を置くと雖、米國は、地理の關係上、大に異なる者なくんばあるべからず、而かも前掲の隻數は、米國が強國として世界に列する最小限なり。云々

千九百十三——十四年度造艦計畫に關して、千九百十二年十一月上旬、海軍卿は、議會に於て次の如く聲言せり、即ち

一國が主權と利權とを保護せんとするに際しては、最も莊嚴に締結せる國際條約すら破棄して顧みざる所、然るを況んや、國際法の箇條に信賴するが如きは、危険千萬なること、古今歴史の證明する所なり、巴奈馬運河は、米國海軍力を二倍にする者にあらず、單に行動時間減縮の事あるに過ぎず、現在の國防上、最低限海軍力は、最新戰艦四十一隻を以てせざるべからず。云々

要するに、米國は、戰鬪第一線に艦齡十年未滿の戰艦二十隻、第二線に艦齡十年以上二十年以下の戰艦二十隻、即ち通計艦齡二十年以下の戰艦四十隻及旗艦一隻を整備せんとする者にして、由來斯の如きは同國不文の法律とも見るべき者なり。而してモンロー主義、門戶開放主義、巴奈馬運河開通等が、海軍整備に關して至大の意義を有することは、從來屢々公にせられたる大統領の敎書並海軍卿の聲言に於て、何人も容易に了解することを得べし。

米國艦隊の現在編成は左の如し。

大西洋艦隊	戰艦	二十一隻	裝甲巡洋艦	五隻
	驅逐艦	二十一隻	潜水艇	十隻
太平洋艦隊	裝甲巡洋艦	四隻	潜水艇	二隻
	驅逐艦	十二隻		

近頃米國の急速なる海軍力の増進に伴ひ、海軍根據地の擴張、貯炭所の増設及通信網の新設に餘念なきこと、殊に太平洋面に於ける如上經營に孜孜として怠りなきが如きは、米國の對外政策を説明する者にあらずして何ぞや。由來本國沿岸太平洋面に於て、英國に次で便宜なる海軍根據地の多くを有する者は、唯

りの米國あるのみ、即ち本國沿岸にありては、軍港としてはニューヨーク、フィラデルフィヤ、ノーフォーク、ボストン、ボーツマス、メリアアイランド、ピュゼットサウンド、要港としてはナラガンセットベイ、チャールレストン、ポートロイヤル、ニューオールレアンス、ペンサコラ、キーウエスト、ワシントン、ガンタナモ、キュレブラ等にして、太平洋面にありては、パールハーバー、(布哇眞珠港)チュウイラ、(南太平洋)グワム、(北太平洋)オロンガポ、カビテ、(以上共に馬尼利等是れなりとす。以上諸港灣中、大西、太平兩洋の咽喉たるべき、巴奈馬運河の入口に當れる、キリビヤン海を管制する所の者は、ガンタナモ(玖巴島の東南端)にして、將來太平洋面に於て、海軍活動の立脚點たらんとする所の者は、本國の太平洋岸にあるピュゼットサウンド、(タコマ附近)メリアアイランド(桑港附近)及太平洋面にあるパールハーバー、チュウイラ、グアム、オロンガンポ、カビテ等の諸港灣にして、是れ等諸港灣は、近年銳意改善擴張せられつゝあり、而して巴奈馬運河の出口に當れるガラバゴ諸島は、多年米國が垂涎しつゝ要地なるも、未だ支配權を得るに至らず、量近傳ふる所に據れば、(千九百十三年二月二十七日

外電)米國は、ニカラグワと一の條約を締結し、ニカラグワに於て、大西、太平兩洋面を連絡すべき一運河を建設すべき獨占權を得て、巴奈馬運河に對する競争の起らんことを豫防すると同時に、フォンセカ灣(ニカラグワとホンジュラスとの國境附近太平洋岸)に優秀なる海軍根據地を得たりと云ふ。太平洋面にある根據地中、パールハーバー及オロンガポーには、ニューヨーク及ピュゼットサウンドと同じく、最大浮船渠の築造に著手し、是れ等の工事は、巴奈馬運河開通と同時に竣工すべき豫定にして、パールハーバーは、太平洋に於ける海軍根據地中最大最良なる者なりと云ふ。又艦隊の行動管掌、在外重要地との通信並海底電信に故障を生じたる場合を補ふ目的を以て、巴奈馬運河地帯の中部、桑港、パールハーバー、グワム、チユチユイラ、馬尼刺等の地に無線電信所設置の經營中なりと云ふ。如上諸設備は、運河の開通に伴ひ、米國の爲、太平洋をして商業的軍事的要勝の地域たらしめんとしつゝあり。モンロー主義狹義の主張は、海軍の改造を促し、其の廣義の解釋は、太平洋の制海權を要すてふ米國識者間の理想は、今や現實に時間問題たるに過ぎず。

抑、海軍根據地は、戰時、艦隊の運命を左右し、重大なる影響を海戰戰略に及ぼす所の者なりとす。是れ根據地は、艦隊に需要品を補充し、艦隊の損害を補修し、艦隊に風浪の避難所を與へ、艦隊に活動の餘勇を貯存せしむる所以の根源なればなり。英國の海軍が世界無比なりと云ふ所以の者は、艦隊其の者が強大優勢なるが爲のみにあらずして、實に世界到る處に完全なる根據地の多くを有するが爲なりとす。若根據地の數及設備に於て、缺ぐる所の者あらんか、如何に強大優勢なる海軍も、活動の餘地之なかるべく、殊に遠く本國と隔絶したる海洋に於て活動することを要する者の爲には、完全なる根據地の有無多少は、實に艦隊存在の運命を左右すべき重大なる意味を有する問題なりとす。故に予は、日露戰爭の末期、漸くに極東に來航したる露國の婆羅的艦隊が、對馬海峽に於て、全滅に陥りたるが如きは、主として其の根據地の形勢が、極めて不利なる者ありしに反し、我が艦隊の根據地が、數に於て、設備に於て、殊に地の利に於て至利なる形勢を占有せしに原因せりと斷言せんとする所の者なり。試に思へ、一の膠州灣、一の西貢を以て、東洋唯一の根據地と頼むの外、艦隊の活動を自由ならし

むべく、近く呼應聲援の用に供すべき別個の根據地を有せざる獨逸及佛國の優勢なる艦隊が、一朝有事に際し、東洋に派遣せられたりとして、露國の婆羅的艦隊と同一の運命に終るの杞憂なきかを。故に獨逸が如何に海軍力を擴張増加したればとて、本國の沿岸を距ること遠き海洋に於ては、到底、英國の海軍に對抗し能はざる者なりと云ふも、恐らく過言にあらずして、現状にありては、遠く北海の地域を距れば、最早獨逸海軍の存在を認め得べからざるの形勢にあり、曾て獨逸が東、西印度にある和蘭の屬領に於て、各々一の港灣を獲得せんとするの企圖を懷けるかに傳へたるが如きも、亦熟慮すれば故なきにあらず。故に想定敵國が派遣し能ふべき海軍力を判斷する爲には、其の固有兵力の外、關係列國との間に錯綜せる政治經濟的相關關係に顧みると同時に、派遣途中及戰場附近に於て、彼れが有する根據地及貯炭所の員數、位置及設備の程度に注意を拂はざるべからず。然り而して米國は、如上の關係に於て、太平洋殊に東洋局面に對して、露、獨、佛諸國に比し、遙に有利なる形勢にある者にして、換言すれば、眞に太平洋の海權を競争し得る資格を具ふる所の者は、歐米列強中、英國を除外すれば、

唯一の米國あるのみ。

前陳の如く、太平洋殊に東洋局面に對して、歐、米列強中、第二位を占むべき、優秀なる海洋的諸設備を有する米國が、能ふ限り其の優勢なる海軍力を擧げて、我が帝國と東洋に於て對抗せざるべからざるが如き事件を醸したりとして、果して其の幾許を派遣し能ふべきかは、目下吾人が知らんと欲する所の主要なる問題なりとす、當今の世、歐洲政局に發言行爲の權利を保留し得べき威力を本國に控置し、尙米國を襲撃し得る餘力と設備とを兼有する者は、唯り英國あるのみ、然るに英國が、現時其の海軍力を準備する爲、米國の海軍を標準以外に置き得るの理由を有せりとすれば、米國も亦其の海軍力を準備するの點に於て、英國の海軍を度外に置き得べきことは、理の當然にして、英、米兩國相互に於て、如上融和の餘地之ありとすれば、米國は、殆んど大西洋岸に受くべき敵襲を顧慮するの必要之なかるべし、何となれば、獨、佛兩國は紛糾錯綜せる歐洲政局の要區に介在して、左顧右眄、優勢なる海軍力を大西洋の彼岸に派遣するの餘力なきのみならず、獨逸の如きは、假令餘力之ありとするも、根據地絶無の現状

は、優勢なる艦隊の有効なる活動を許さざる者之あればなり。由來米國は、地理上歐洲諸列強と大洋を夾んで遠く隔在せるに伴ふて、歐洲政局に密接なる煩累を有せざると、歐洲諸列強が、米國の大西洋近海に於て、有利なる根據地を有せざるとの二事に因り、多くの場合に於て、其の海軍の主力を擧げて、東洋に派遣し得べき便宜を有するも、事端發生初動の時期より、始終大西洋面を空虚にするが如き膽力は、果して米國政治當局者の胸字に貯存ありや否や、漁夫的利益を占めんとして、其の機會を逸せざる機敏なる歐洲列強に備へ、且狹義なるモンロー主義活用の支援に供する爲、少くも一艦隊を大西洋面、就中キリビヤン海附近に控置するの必要は之なきや、考究して茲に至れば、吾人は、米國の東洋に派遣し得べき海軍力を、左表の如く、其の準備威力の三分の二を越ゆることを許さずと斷言するに憚らず。されども斯の如き控置艦隊も、四圍の形勢之を許すに至れば、結局東洋に増遣せらるべきこと勿論なれば、對手國は、初より其の全力を迎ふるの覺悟なかるべからず。

大正六年(千九百十七年)度に於ける豫想

艦種	隻數	摘	要
戰艦	二十四隻	進水後十五年以内の者三分の二	
巡洋戰艦	八隻	同前(巡洋戰艦建造の計畫なき者の如し)	
小巡洋艦	二隻	速力二十五節以上の者(小巡洋艦建造の新計畫なき者の如し)	

十二 威力ある國防の經營は一に舉國一致の勤儉に

頼らざるべからず

民力の休養固より必要事件なり、然れども威力の保障なき民力は、威力を以て餘儀なくせらるゝ四圍の壓迫に對し、安固を缺く者なることに想到せざるべからず。然り而して民力の休養を先にすべきや、將た又威力の準備を先にすべきやは、一に懸りて四圍の形勢にあり、然るに四圍の形勢は、決して一國家の爲利便なるが如く、機を測りて推移變遷すべき性質の者にあらざれば、國民は、居常治に居て亂を思ひ、百年の長計に違算なからんことを期せざるべからず。抑、實際的威力の準備は、其の大陸的なると海洋的なるとを問はず、臨時必要に臨み、一朝一夕に急造し得べきにあらず、就中陸軍は、假りに今一個師團の増設に着手したりとして、當年より直に戰時の用を充たすに足るべき、完全なる編制を有する師團を以て、國防の用に提供することを許さず。何となれば、兵役期限の年數、詳説すれば、現役、豫備役、後備役通算約十七ヶ年の年月を経るにあらざれ

ば、完全なる戰時要員を養成し、且貯存することを得ざればなり。故に若假りに國家存在の爲、必要なる國際的威力を準備するの餘力が、我が國民に缺乏せりとすれば、我が帝國は、既に業に獨立の機能に缺くる者あることを反證する所以にして、若眞に然りとすれば、優勝劣敗の現勢下にありては、遺憾ながら強者の強制壓迫に屈從するの外、他に選擇すべき手段の餘地之なかるべし。

我が陸海軍備の擴充は、日露戰役後久しきに亘る懸案にして、日露講和條件が軍費の補償を齎さざりし餘波は、爾來歳々國民に重荷を強ひつゝあり。而して第一次の軍備擴充は、今や漸く完成の域に達したるも、四圍の形勢は、未だ以て吾人をして安堵せしむる能はず、爲に第二次軍備擴充は、近年朝野の宿題となり、今尙解決の期に達せず。此の時に當り、政治當局者は、國民の重荷を増すことなく、而かも時勢の要求を充たさんが爲め、制度整理、行政刷新を計りて日も亦足らざる者の如く、其勞や實に多とせざるべからず。然り而して近年朝野の政治家並に一般國民は、海軍擴充の計畫に對しては、異口同音に、其の着手が時勢の推移變遷に遅れざらんことを憂ふる者の如く、之に反して陸軍擴充の計畫に對し

ては、財政窮乏、國民は、到底其の負擔に堪ふる者にあらずとして、反對説を唱ふる者多く、而して二つながら宿題となりて今日に及べり。而して今や制度整理、行政刷新の案、着々實行の運に向ひつゝあるに當り、軍備擴充問題は、復將に朝野の政治家に拉へられて、論戰の好題目たらんとせり、而して其の論難する所を案するに、大體に於て、歸着する所は、本書中屢々摘録引用したる某海主陸從論者の持論に附和雷同し、加ふるに財政難を反覆するに外ならずして、結局陸軍の擴充を以て、機宜に適せざる建策なりとし、更に甚しきは、日、露兩國國交の現狀に附會して、大陸に於ける國際關係上、有害無益なりと、論斷する者あるが如きは、國家の爲痛歎に堪へざるなり。右等陸軍軍備擴充反對論者の説く所は、恰も某海主陸從論者の持論の如く、大陸に對しては、極めて樂觀的にして、殆ど國防の眞意義、國際關係の潛勢を等閑視したる、苟安姑息の議論たるを免れず。今彼れ等が唱ふる所の論旨を摘録すれば、概ね次の如し、曰く、露國は、我が唯一の大陸に於ける接壤陸軍國なり、故に我が陸軍の擴充は、露國に對する爲にのみ必要にして、露國以外の列強に對しては、國防上徒に無用の長物たるに過ぎず、故

に我が陸軍の擴充は、即ち露國に對し敵意を懷けることを表示する所以に外ならずして、換言すれば、露國が報復の敵意を懷けることを前提とするにあらざれば、理解し得べからざる準備作業なりとす、然るに日、露兩國の國交は、第一協約殊に第二協約締結以來、日に親善に赴き、遺憾なく兩者の間に意思疏通し、相互に既得の權利利益を尊重して、相犯すが如き傾向なきのみならず、政治的に經濟的に、常に知照して同一歩調を取り、以て支那及列強に應接し、爾來今日に至るまで、利害の相扞格する者之なきのみならず、平行的の權利利益を擁護する爲には、相互に援助支撐を交換せり、加ふるに最近更に日露新協約の締結を見る、未だ公表の機運に達せざるも、其の内容は、北滿洲及外蒙古に於ける露國の優勝權と、南滿洲及東部内蒙古に於ける我が優勝權とを、交換的に承認する者にして、爲に一層從來兩國間に交感しつゝありし猜疑的念慮を清掃するに足る者なり、而して此の新協約が齎す所の兩國國交の親善は、英、佛、露三國協約の鞏固なる紐條が保障する所の者なれば、一時彌縫的發作にあらずして、永久的親和の表徴なること信賴するに足るべき者あり、伴ふて露國に報復心なきこ

とは、一點疑ふべき餘地なき所の者なりとす、此の時に當り、隣邦の猜疑心を促し、敵意を誘ふが如き我が陸軍の擴充は、國際關係上極めて有害無益なりとす、若露國の言動にして、吾人をして戒心を緩ふること能はざらしむる者之ありとせば、假令ひ國交の親善を害するも、躊躇することを許さずと雖、今や之なし、果して然らば、我が陸軍の擴充計畫の如きは、機宜に適せざる建策にして、絶対に吾人が承認する能はざる所の者なりとす、然るを況んや財政の窮乏之を許さざる者あるに於てをやと。斯の如き苟安姑息的樂觀論は、喋々論難するの價値なきも、動もすれば、世人の耳に入り易く、而かも世人を誤り易く、延ひて國家百年の長計に違算を來たすの恐れなしとせざれば、輕々に默過することを得ず。抑、國防に關する經營は、政黨政派乃至國民の私情より打算して、云爲すべき問題にあらずして、虚心平氣、公明正大に、四圍の形勢に顧み、國交際の歴史を慮り、遠謀深慮して萬全を策せざるべからず。

予は、最近に、日、露兩國の間に締結せられたりとして傳ふる所の、新協約なる者の有無及其の内容の如何を知るに由なき者なるも、今假りに世間の識者が

信ずる所に隨ひ、新協約の締結せられたる事が事實なりとして、以下少しく私見を開陳して、朝野の政治家及一般國民の至誠に訴へんとす。樂觀論者は、我が陸軍の擴充を以て、日露新協約の精神に背馳する者なりと云ふも、露國は、果して新協約の精神を信仰して、西伯利亞鐵道の複線工事を中止する者なりや否や、思ふに露國たる者、斯の如き狂愚を學ぶ者にあらざるべし、然り而して西伯利亞鐵道複線工事の完成は、極めて優勢なる兵力を、西伯利亞要區に増設したるに等しき効果を齎す所の者なるにも拘はらず、我が帝國は、露國の敵意を買ふ事を慮りて、國防の經營を抑制し、所謂宋襄の仁を學ぶの理由之ありや否や、凡そ互讓的勢力範圍に關する協約は、相互の利害一致平行する者あるか(一)、交換的目的物の存在する者あるか(二)、相互に國際的威力が國際的交渉事件に隨從不可能なる地方に對する緩衝策の爲にするか(三)あらざれば、決して存在し得べからざる所の者にして、彼の曾て佛、伊兩國間に存在せりと傳へられたる摩呂哥對トリポリ交換的密的並に英、伊兩國間に存在せりと傳へられたる埃及對トリポリに關する密約の如き、又英、佛兩國間に締結せられたる埃及對摩呂哥に

關する協約の如きは、其の性質(一)、(二)に屬する者にして、英、露兩國間に締結せられたる波斯及阿富汗斯坦に關する協約の如きは、其の性質(二)、(三)に屬す、而して若眞に日露新協約が存在せりとすれば、其の性質は、主として(一)、(二)に屬する者にして、殊に露國の爲には、(三)の性質を含むこと之なしとせず、然るに樂觀論者は、拉へ來りて、陸軍軍備抑制の論據となさんとす、予は、其の理由を捕捉するに苦しむ所の者なり。殊に吾人が慎重に考慮せざるべからざる所の者は、協約其の者の内容が、同盟なると否らざるを問はず、一般に價值ある協約は、相對的に國際的威力均勢の基礎の上ならでは、決して存在し得べからざる者なることに想到せざるべからざること即ち是なり、眞に相互に交換的兵力の援助に依頼する者は、所謂同盟にして、佛、露二國同盟、獨、奧、伊、三國同盟、日、英二國同盟の如きは、即ち是なり、其の他の協約は、其の内容の精神が、所謂同盟なる者に髣髴たる者之あると同時に、又相互に國際的威力不備なるか、或は其の他の事情の爲、待機的緩衝策として、相互に國交の親善を装ひ、互讓的融和に勉めつつある者も之あり、日米、日佛、日露諸協約の如きは、夫れ果して何れに屬すべき

性質の者なるか、又其の信頼し得べき程度が、果して如何なるべき者なるかは、吾人は、自然の趨勢に由り、必至の形勢を判斷するの外なかるべし。

世人は、近き過去に於て、支那に勃發したる革命の動亂を豫察したる者之ありや否や、實に此の動亂は、世界をして驚かしめたる一新大事件にして、今や支那共和國は、漸くに其の形式を整へたりと雖、一致團結して、新政の端緒を整理せざるべからざるの時に當り、動もすれば、黨争の爲、内政は、紛亂に陥り、爲に國土の崩壞を馴致し、列強の利權蠶食の勢は、今や將に收拾するに由なからんとせり。此の時に當り、乘ぜんとして隙を窺へる列強は、恰も猫が鼠を狙へるが如く、獵師が發射の好機會を待つ者に異ならず。如上の趨勢は、根柢を有する露國の活動をして、外蒙古及新疆に於て、一段の勢力を加へしめ、英國も亦遅れざらんとして、西藏に容喙せり、佛、獨、米諸國は、慎重の態度を装へるも、由來決して乘すべき機會を逸する者にあらず、而して支那共和政府は、逡巡、顧眄出づる所を知らざる者の如く、呆然として自失せり、此の間、世人は、如上の趨勢に伴ふて、將來續發せんとする形勢が、果して如何なる性質を帶ぶる者なりやを豫言

し得る者之ありや否や、斯かる現狀に於て、我帝國の責任及我が國民の覺悟は、果して如何、朝野の政治家並に一般國民は、億を以て指を屈する支那人民及廣大なる支那領土の獨立及其の保全は、支那自らに必要なるのみならず、實に東洋の平和を保障し、我が帝國の安固福利を保持増進する爲にも、亦等閑視すべからざる一大偉業なる所以の理を自覺し得ざるか、請ふ見よ、支那に對する列強の勢力範圍的割據乃至領土的分割の餘勢は、東洋をして禍亂の巷たらしむるの恐あるのみならず、伴ふて我が經濟界の爲、唯一無二なる重要なる市場を蹂躪せられ、其の蒙る所の打撃は、國家經濟上實に致命的にして、思ふに何物も以て償ふに足る者あらざることを。然るに外蒙古及新疆は、露國の爲、支那本部に對する發展の立脚點に外ならずして、北方に於ては、哈克圖——庫倫——張家口鐵道の敷設の如きは、一種の時日問題にして、西方に於ては、中央亞細亞鐵道の末端なるコーカンド、若くは西伯利亞鐵道の某一點、例令へばオムスク附近より、カシユガル、若くは伊犁を経て、長城の西端なる嘉裕關に通ずる鐵道の敷設の如きも、亦過去に於ける露國の大規模なる經營の成效に顧みれば、決して夢想的に閑却

することを許さず。斯の如き宏大無邊なる、露國の對支那發展の潛勢は、動搖し易き趨勢を帶ぶる支那の運命に對し、將來果して如何なる作用をか及ぼすべき、吾人は、此の間に處し、日、露兩國國交の外觀的現狀に樂觀し、不幸なる隣邦の趨勢を對岸火視して、自然に放任することを得るや否や、將た又一朝露國が、長城以南の地域に驥足を展べ、其の勢力範圍を擴張することありとするも、吾人は、拱手黙視せざるべからざるか。英、佛、露三國間に存在せる協約を基礎として、築かれつゝある三國國交の親善は、近時殊に顯著なる者あるも、露國の黒海艦隊をして、自由にダーダネルス海峽を通航せしむることは、到底英國の首肯する能はざる所の者なるべく、又亞細亞土耳其及波斯の沿岸地域に對して企てられつゝある大陸的蠶食は、英國の絶對に承認する能はざる所の者なるべし。果して然らば、日、露兩國間に、日を追ふて彌々増進しつゝある親善なる國交も、以て融和するの餘地なきが如き、重要なる事件の發生が、將來に絶無なることを斷言し得る者之ありや否や。吾人は、好んで親交國の敵意を買ふを以て、屑とする者にあらず、然れども歴史は、確かに遺傳的なる露國の信條を證明し、潛勢

は、吾人の杞憂が必至の事件なることを暗示せり。假りに日露新協約なる者が存在せりとするも、思ふに一般普通の協約と等しく、現實的に吾人の耳目に觸覺する範圍に於ける保障に過ぎずして、未來に於ける潛勢にまで言及する者にあらざるべく、又假令ひ善意を以て漲れる協約締結の當事者も、將來にまで、相互に歴史的信條を打破して、望蜀の情を根絶せしむるが如き勢力は、恐らく之なかるべし、段鑑遠からず、例令へば千九百十一年(明治四十四年)六月、發表せられたる沿海州領海を沿岸十二海里の地線にまで擴張せんとする露國の法律は、日露漁業條約が約定せる、我が既得の利權を侵害するのみならず、國際公法の公海に關する原則を無視し、英、米兩國間に存在せる、巴奈馬運河に關する、ヘイ、ボンズフォード條約第三條は、極めて著しく兩國の解釋を異にして紛議の因を爲し、モンロー主義は、時代を経るに隨ひ、特種任意の解釋を附せらるゝが如きは、即ち其の適例なりとす、果して然らば、國際關係上、吾人の戒心を緩ふすべからざる者あることは、將來も猶過去の如し、吾人は、唯り此の戒心が事實とならざらんことを希ふのみ。故に我が國民は、一大偉業に對し、功を一簣に虧ぐの

弊に陥ることなきやに顧み、遠謀深慮して、百年の長計を講ぜざるべからず。

東洋のモンロー主義を鼓吹し、千歳の一大偉業を成就せざるべからざる運命を有する、我が帝國の國防經營は、決して苟安姑息、偏輕偏重なることを許さざるの事理は、予が既に反覆詳論したる所にして、其の負擔は、絶體絶命、決して我が國民の避くべからざる所の者なれば、遠謀深慮、忍苦努力、協力一致して、時勢が然らしむる所の要求を充たし、悔を後世に貽すが如き失態あるべからず。請ふ見よ、生命財産の安固を希ふ者は、保険料を拂はざるべからず、利益の増殖を欲する者は、資本を投ぜざるべからざることを。換言すれば、陸海軍備の擴充は、半面には保険料にして、半面には資本なり、此の保険料の力に依るにあらざれば、大陸に於ける我が重要なる國防線なると同時に、不幸なる隣邦を掩護すべき側防陣地なる、南滿洲の安固得て期すべからず、又此の資本の力に頼るにあらざれば、我が唯一の市場なると同時に、東洋の平和を保障する所以の唯一條件なる、支那の獨立及其の領土の保全得て望むべからず。故に曰く、陸海軍備の擴充は、刻下帝國の最先急務なりと。然るに若過重に、日、露國交の親善なる現狀に

信賴して、樂觀論者の如く輕卒に國防に關する經營問題を結論し得る者とすれば、日、米兩國間には、明治四十一年十一月、大平洋に於ける各自所領地及支那に關して交換せられたる協約あるのみならず、過去五十有餘年間は勿論、現在に於ける兩國國交の親善は、決して日、露兩國の關係に讓る者にあらず、又日、佛兩國間には、明治四十年六月、各自所領地及支那に關して交換せられたる協約あるのみならず、過去及現在に於ける兩國國交の親善は、毫も日、露兩國の關係と等差ある者にあらず、而して英國は、唯一無二の同盟國なり、日、獨兩國間には、何等の協約なきも、兩國國交の親善は、他の列國に對する者と異なることなし、若又假りに獨逸に對して、國交斷絶するが如き不幸に遭遇することありとするも、獨逸に對する英國の威壓は、以て之を制するに足る、故に我が帝國は、陸軍を擴充することを要せざるは勿論、海軍も亦之を緊縮することを得べし、然るに陸海軍備の擴充に熱中するが如きは、列國に對する國交の親善を害すること極めて甚大にして、寸毫も益なき企圖なりと結論し得るにあらざるか。若此の結論を以て、牽強附會、不合理なる者なりとすれば、日、露協約が齎す國交の親善

は、信賴するに足るべき者あるも、他の列國との協約が齎す國交の親善は、戒心を加へざるべからずと結論せざるべからず、豈斯の如き沒條理あらんや。故に曰く、樂觀論者の議論の如きは、啻に世人を誤るの害あるのみならず、實に國家百年の長計に違算を胚胎する者なりと。

要するに、時勢が要求する所の我が國家的必要は、現時の國情にありては、上下官民、舉國一致の勤儉に頼るにあらざれば、到底之を充たすことを得ず。而して時勢の推移變遷は、人智の先見豫測の範圍外に逸脱するを常とすれば、目的の爲には手段を選ばず、時勢が要求する國家の必要に應ぜんが爲には、政府は、時として、減税の前言を食まざるを得ず。是れ政府としては、一を惜んで百を失ふが如き犠牲的災厄の下に、國家を放任するに優ること萬々なればなり。果して然らば、彼の重大なる責任に對し、無頓着に盲從若くは非議するを以て、國民たるの權利義務を決算し得べきや否や、天祐の冥助は、一誠にあり、政黨、藩閥、貴賤、貧富の間に於ける情弊を一掃し、誠を以て求め、誠を以て捧ぐ、茲に始めて上下官民の和合を期し得べく、所謂天の時は、地の利に如かず、地の利は、人

の和に如かざる者にして、天祐は、求めずして自ら到らん。由來我が國民は、瘠の貧なり、故に國防經營の爲にする負擔に於て、歐、米富強國國民と並馳せんことは、尋常一様の事にあらず、否寧ろ不可能事と云ふも恐らく過言にあらざるべし、然れども國防經營の負擔不可能なりとの辭柄は、以て不可避的而かも致命的災厄を免れ得べきにあらず、免れ得べからざる災厄は、千思萬考、必死の勇を盡して、一條の血路を求めざるべからざる現實的問題にあらざるか。試みに思へ、貧賤なる者が、同一程度の生活に由り、富貴なる者と、生存を競争せんとすること、固より不可能事なり、然れども應分の程度に於ける生活に由りて、試みんとする競争は、必ずしも其の成效を保障し得られざるにあらず、何となれば、粗衣粗食必しも精力を減殺する所以にあらず、美衣美食必しも强健を保持する所以にあらざればなり、然るに近時一般に驕奢華美、富力に餘りある歐、米人の生活に模倣して、日も亦足らざらんとし、上の趣く所、下に風を成し、自然の結果、物價昂騰、生活難の聲は、今や都鄙の套語となれり、斯くて一方には、避くべからざる、必任的なる國防經營の負擔が、堪へ得べからざる重荷なることを訴ふ、斯

如きは、果して不可避的而かも致命的なる災厄の殺到を、目前に期待する瘠貧國國民の本領なりと云ふことを得べきや否や。國家的對外事業は、今尙創造の渡過期に屬し、勤儉以て時勢の要求を充たしつゝ進むにあらざれば、守成の域に達することを得ざる我が國民は、克己奮勵、自強自制するにあらざれば、帝國の荷へる天職に應ふることを得ず、驕奢は、文弱を培ひ、勤儉は、尙武を養ふ、勤儉と尙武とは、古來我が國にありては、猶車の兩輪の如く、立國の基礎は、實に此の兩輪の上において存し、國勢國力の隆替盛衰は、一に此の基礎の動搖に伴ひて消長したりしが、如上の關係は、近時一層其の切實なる者あるを認む、何となれば、年々歳々、輸入超過、正貨流出の傾きにある我が瘠貧國の現状に顧みれば、國防經營上、所要の擴張充實に缺くべからざる經費は、一に上下官民、舉國協力一致の勤儉に由りて得たる資本に待つの外、信賴すべき手段之なければなり。今や、予は、終りに臨み、重複を顧ず、左に舊著中の一節を摘要し、敢て陸軍非擴張論者の意見を叩き、以て本編を終らんとす。即ち

日清戦争避け得べかりしか、日露戦争避け得べかりしか、若之を避けんと

すれば、我が帝國は、其の名譽權利を犠牲に供せざるべからざるのみならず、其の獨立も亦危険なる情態に陥り、我が國民は、將來當然享受發展せざるべからざる天與の福利をも、外國國民の掌裡に委棄せざるべからざりしなり。由來朝鮮半島に於ける、政治的優勝權の得喪は、實に我が帝國の死活問題にして、同半島の大陸及海洋に面する兩端に於ける自然的地理は、殊に帝國をして、一層如上の感を深からしめ、遂に前後相踵いで、清、露兩大國と、敢て于戈の間に應接することを辭せざらしめたる所以にして、兩大戰役の根本的主眼は、實に如上地理の關係に存し、殖民地としての價値の如きは、蓋次等に位する問題に過ぎざりしなり。如何となれば、我が帝國固有の領土と朝鮮半島との地理的關係に顧みれば、朝鮮半島に於ける政治的優勝權を以て、大陸強大國の壟斷に委ぬることは、恰も護身の利刀を敵手に委ねて、自己の死命を制するの自由を敵に與ふるに等しければなり、殊に露國の爲には、朝鮮半島に於ける優勝權の壟斷は、關東半島及亞母爾半島と相待ちて、我が帝國固有領土の咽喉に擬せんとする三枝鎗の軸又たるべき作用を呈すべき性質を帶べり、故に

若我が帝國が、過去二大戰役を避けて、清、露兩國の自由の跳梁に放任せしなれば、其の結果は、拱手して咽喉に致命的刺突を甘受するに異ならざる危難に陥りしならん。如上の理由は、東洋の地圖を一瞥する者は、三尺の童兒と雖、恐らく理解に苦まざる所の者なるべし、然るに今や堂々たる政治家及軍事當局者中、無意味にも北守南進を叫び、甚しきに至りては、無謀にも朝鮮の領土權、南滿洲に於ける勢力範圍をも放棄するを以て、國家百年の長計なりと唱ふる者あるが如きは、實に國家の爲寒心に耐へざるなり。

熟く我が帝國對大陸の地理歴史的關係に顧みれば、朝鮮及關東半島は、大陸に對する我が國防上、最も緊要なる要塞にして、西方遼河の上流地域より、東方豆滿江に亘る滿洲一帯の地は、要塞の爲、主要なる外防禦線なり、由來要塞の運命の長短は、外防禦線に於ける抵抗力強弱の程度に左右せらるべき者にして、要塞の價値、等位、高上するに伴ひ、外防禦線は、一層堅固に構成保持せられざるべからず。然り而して國防上緊要なる要塞たる朝鮮及關東半島を、我が帝國の掌裡に保有し得ると否とは、大陸に對し我が帝國の主權を擁護し

得るや否やの分岐點にして、實に我が帝國存在の運命を左右するに足るべき性質の者なると同時に、滿洲の地域は、大陸に對する我が帝國國防上主要なる外防禦線なれば、吾人は、無意味に要塞に退嬰して、消極的防守に甘んずることを得ざるは勿論、無謀にも要塞を開放して、鑿くことを知らざる侵略者の領有に委することを得ず。

予は、今一步を北守南進論者に譲り、大陸的國防は、朝鮮國境を嬰守するを以て足れりと假定せん、而して試みに論者に問はん、政治的に經濟的に、現今世界列強競争の目的物は那邊にありやと、東洋に於ける形勢は、日に變じ月に遷りつゝあり、牆に鬩ぐの兄弟にして、外侮を禦ぐの慨なき支那國民は、列強の保障あるにも拘はらず、自ら其の領土を保全し能はざる者の如く、又彼の領土保全を保障しつゝある列強中、勢已むを得ざる者の如く裝ふて、陰に割據を企てつゝあり、斯の如く自働的他働的に解體せんとしつゝある支那は、即ち是れ暗闘的に列強競争の目的物なることは、既に業に予が反覆論述したる所にして、思ふに論者も亦異論之なかるべし。果して然らば、此の暗闘的競

争場裡に於て、一朝事端勃發したる場合に於て、我が帝國活動の立脚點として、南滿洲を我が勢力範圍に保留し置くの必要は之なきや、此の事たる一旦退嬰政策が事實として經營せらるゝに至れば、爾後隨時必要に臨み、再之を回收せんとするも、到底容易なる盡力を以て成效し得べきにあらず、果して然らば、論者は、如上の場合に於て、袖手列強の跳梁割據に委して、傍觀に甘んぜんとする者なるか、將た他に立脚點として利用し得べき、而かも設備せられたる根據地を求め得べきや否や、若之ありとせば、悉く我が勢力未確定、更に多くの努力を以てするにあらざれば、求めて之を得べからず。故に退嬰政策は、常に重要な外防禦線を開放して、大陸に對する我が國防線を薄弱ならしむるのみならず、列強競争場裡に於ける、有利なる活動の立脚點を放棄する者にして、斯の如きは現時東洋政局に於ける趨勢に伴はざるのみならず、恐らく東洋政局に牛耳を握らんとする我が帝國國民の共同目的に合せざるべし。殊に滿洲に於ける我が特殊の地位は、多くの生命と財産とを犠牲に供し、二回の大戦役を経て、漸く贏ち得たる、極めて高價なる代償物件なれば、吾

人は、義務を以てするも、故なく退嬰に甘んずることを得ず、況んや滿洲の地域に於ては、現在に擁護すべき利權、將來に發展を豫期すべき、利源尠からざるに於てをや、況んや又不確定なる目的物に對する代償として、確定の利權を放棄するの理由なきに於てをや。思ふに消極的退嬰政策論者の夢想は、北方大陸を棄て、他の方面に於て他の手段を以て、新に活動の企圖を策せんとする者なるべし、予も亦論者の夢想に想到せざるにあらず、然れども試みに思へ、北方大陸に於て退嬰し得るに過ぎざるが如き陸軍力を擁する國民が、他の方面に向ふて活動を企てんとするが如き考案は、眞に架空の夢想にあらざるかを、何となれば、由來退嬰的國防は、其の成效殆んど絶望にして、捲土重來の大陸軍が、陸上交通法の發達したる現時に於て、朝鮮全域を蹂躪せんとすること、盖難事にあらざれば、我が國民は、他の方面に力を伸ばさんとするも、恐らく餘力の貯存に缺乏するに至ればなり。故に予は、以爲らく、滿洲に於てする積極的防衛の可能性は、即ち他の方面に向ふてする我が國民の活動を可能性ならしむる所以の潜勢力なりと。

又北守南進論者は、曰く、滿洲及朝鮮は、瘠土多く且其の住民の生活程度低きが故に、我が殖民は、勞銀に於て彼れ等と競争することを得ず、隨て我が過剩人口を彼の地に移植し且増殖して、母國に忠實なる殖民地を形成せんことは、到底望なきことに屬す、是れ等の地方、遺利の未だ開發せられざる者あると勞銀の低廉なるとの二事は、投資的殖民地に適當にして、且我が生産餘剰の販路を擴張し得るの利あるを以て、全然無視することを得ずと雖、大陸方面に領土的勢力圏を擴張せんが爲、大なる陸軍を準備するが如きは、得失相償はざる徒勞にして、國力を消耗するに過ぎざれば、大陸方面に於ける防衛は、消極的に括約して、南方に向ふてする發展策に資するの優れるに如かずと。予は、以爲らく、論者の説く所、其の半面に理由あるが如きも、主義經濟的に偏し、國家存在上、最先最急必要條件、即ち國防問題を等閑に看過し去れるを以て、國家政策としては、大に考慮することを要すと。何となれば朝鮮及滿洲の地に於て、我が帝國が優勝權を要したる根本的主眼は、殖民地としての價值にあらざりしを以てなり。回顧せよ、我が帝國は、朝鮮の獨立を宣言する爲、何故に

清國と戦ひしや、投資的殖民地を得んが爲なりしか、或は又殖民的殖民地を得んが爲なりしか、將た又生産餘剰の市場を得んが爲なりしか、否、否、決して然らず、朝鮮半島に於ける優勝權が、大陸強大國の掌握に歸することは、主として地理上帝國の存在に致命的危険を及ぼすの勢ありしに因る、試みに東洋の地圖上に一瞥を投ぜよ、朝鮮半島に於ける優勝權が、一朝大陸強大國の掌握に歸したる場合を假想せんに、半島の地理の自然は、恰も日本海及黃海を以て兩翼と爲せる鷺鳥の如く、其の銳利なる鉤嘴は、將に帝國の領土を攫み去らんとするの勢あるにあらずや。故に我が帝國は、國家の存在を保障する爲、朝鮮半島に優勝權を占むるか、然らざれば少くも極東の一獨立國として、關係列國をして其の不可侵權を承認せしめ、依て以て大陸に對する我が國防の塹壕壘壁に擬することを要したりしなり、然るに曾て清國は、朝鮮に宗主權を唱へ、傲然屬邦視するの傾向を標榜したることは、偶、帝國をして、干戈を執りて立つに至らしめたる所以なりとす。斯くて得たる朝鮮の獨立權は、我が帝國が、三國干涉の爲、一旦其の有に歸したる、遼東半島に於ける領土權を失

ひたるに伴ひ、一方に於て陰然企圖せられつゝありし露國南下の勢力に肉薄せられ、大陸に對する我が國防の塹壕は、將に彼れが靴底に依りて埋没せられんとし、我が國防の壘壁は、將に彼れが銃劍の摩する所とならんとし、半島に於ける我が優勝權は、彼れが馬蹄の塵に掩覆せられんとするに至れり。由來遼東半島の地勢たるや、黑龍江口以南、豆滿江沿岸に亘る露國の領域と相待ちて、朝鮮半島を抱擁し、其の形勢、恰も大人が稚兒を其の兩掌上に翻弄する者に似て、半島の運命は、一に懸りて此の巨人の意思如何に左右せられんとしつゝありしなり。斯かる形勢の下にある半島の優勝權を、我が帝國干涉の下に保障することは、帝國の爲、致命的危険を豫防する所以の唯一手段にして、滿洲に於ける露國南下の勢力を遮斷することは、大陸に對する我が國防線の大部分を安固ならしむると同時に、東洋に於ける平和維持の爲、清國領土の保全を保障する所以の最後の手段にして、共に我が帝國自衛上、缺ぐべからざる手段方法なれば、遂に我が帝國をして、立て露國と戦はざるを得ざるに至らしめたる所以なりとす。前後二大戦役の根本的主眼は、正に然り、斯の如

くにして得たる政治的優勝權は、我が國民海外發展の爲、渴望しつゝありし殖民地としての經濟的優勝權を齎したるに過ぎずして、由來殖民地を得んが爲、戦ふたるにあらざるの理は、自ら首肯するに足る者之あらん。果して然らば、今や我が帝國は、朝鮮半島に於ける領土權を鞏固にし、滿洲に於ける勢力範圍を固守せざるべからず。如上の要求は、到底消極防拂的防衛海主陸從的軍備に依りて充たし得べき性質の者にあらず、何となれば、若積極返突的防衛陸海協同的軍備の準備を忽にするときは、自ら讓步退嬰的の防衛に陥り、讓步退嬰的防衛は、萎靡不振の國防となり、大陸に對する我が國防線は、再不安危険の状態に陥るのみならず、伴ふて既得確定の利權をも併せて失はんとするの恐あることは、過去に於て將に陥らんとせし苦き經驗に顧れば、思ひ半に過ぎざる者之あればなり。故に曰く、北守南進論は、國防問題を等閑に看過するの弊ありと、況んや滿洲の勢力範圍及朝鮮の領土權をも放棄して無頓着ならんとする無謀の對外政策論をや。

威力ある國防と精銳なる國軍（一名協同報國論）終

大正三年一月廿九日印刷
大正三年二月二日發行

正價金壹圓

著者 三宅覺太郎

東京市麴町區飯田町二丁目三十三番地
株式會社兵林館代表者

發行者 柴田源藏

東京市麴町區飯田町二丁目三十三番地

印刷所 株式會社兵林館印刷工場

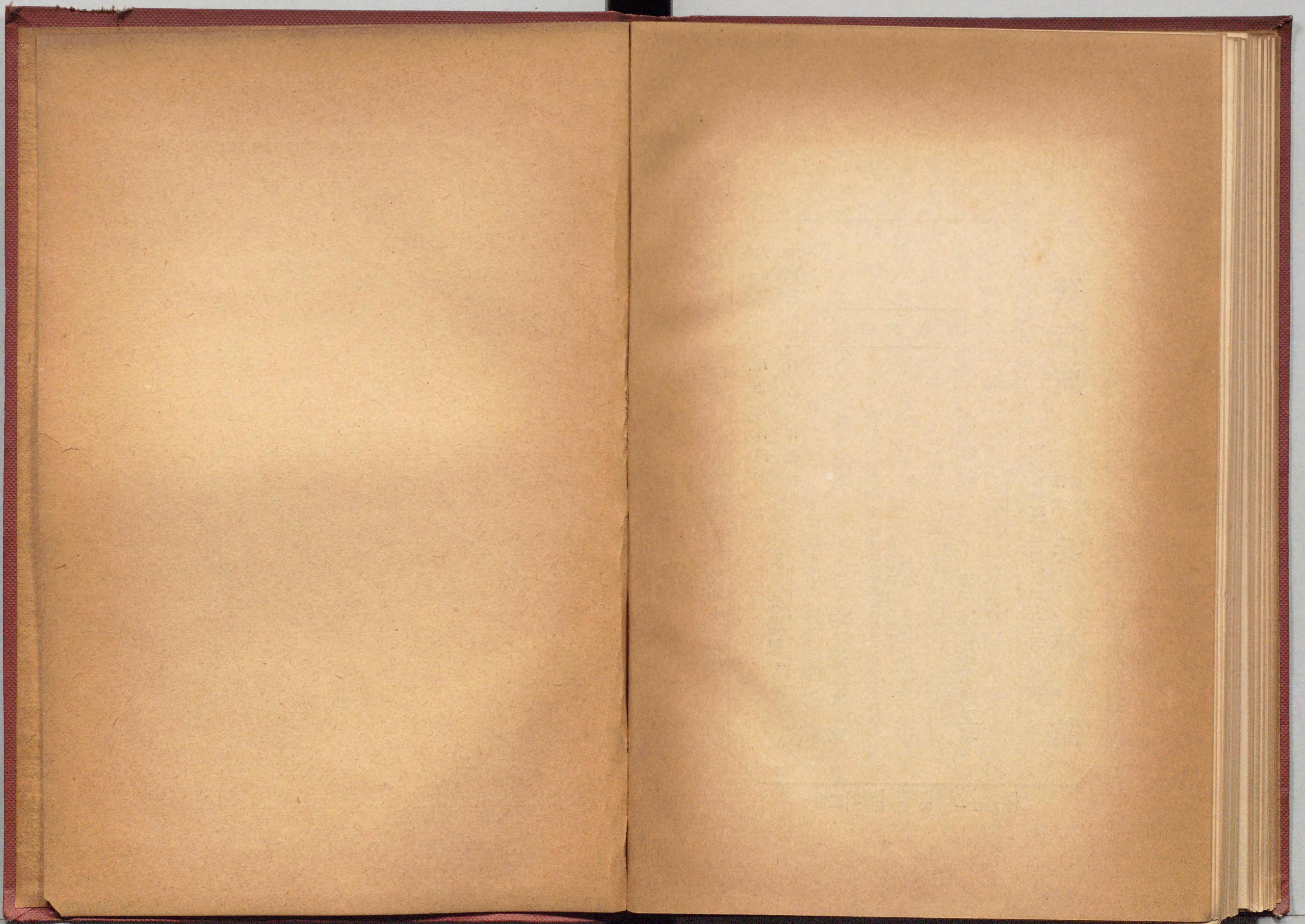
不許複製

發行所 株式會社兵林館

東京市麴町區飯田町二丁目三十三番地

振替口座東京四九三六番

電話 本社用 町番 六八九番 工場用 町番 二一三五番



威力ある國防と精銳なる國軍正誤

別目次	頁行	誤	正
緒言	六〇六	定	定
一 整へざるべからず	六〇三	整へざるべからず	整へざるべからず
二 及ぼし	五九四	及ぼし	及ぼし
三 且	五八七	且	且
四 且	五八〇	且	且
五 且	五七三	且	且
六 且	五六六	且	且
七 且	五五九	且	且
八 且	五五二	且	且
九 且	五四五	且	且
十 且	五四八	且	且
十一 且	五四一	且	且
十二 且	五三四	且	且
十三 且	五二七	且	且
十四 且	五二〇	且	且
十五 且	五一三	且	且
十六 且	五〇六	且	且
十七 且	四九九	且	且
十八 且	四九二	且	且
十九 且	四八五	且	且
二十 且	四七八	且	且
二十一 且	四七二	且	且
二十二 且	四六五	且	且
二十三 且	四五八	且	且
二十四 且	四五二	且	且
二十五 且	四四五	且	且
二十六 且	四三九	且	且
二十七 且	四三二	且	且
二十八 且	四二六	且	且
二十九 且	四一九	且	且
三十 且	四一三	且	且
三十一 且	四〇六	且	且
三十二 且	四〇〇	且	且
三十三 且	三九三	且	且
三十四 且	三八七	且	且
三十五 且	三八〇	且	且
三十六 且	三七四	且	且
三十七 且	三七七	且	且
三十八 且	三七〇	且	且
三十九 且	三六四	且	且
四十 且	三五七	且	且
四十一 且	三五〇	且	且
四十二 且	三四四	且	且
四十三 且	三三七	且	且
四十四 且	三三〇	且	且
四十五 且	三二四	且	且
四十六 且	三一七	且	且
四十七 且	三一〇	且	且
四十八 且	三〇四	且	且
四十九 且	二九七	且	且
五十 且	二九〇	且	且
五十一 且	二八四	且	且
五十二 且	二七七	且	且
五十三 且	二七〇	且	且
五十四 且	二六四	且	且
五十五 且	二五七	且	且
五十六 且	二五〇	且	且
五十七 且	二四四	且	且
五十八 且	二三七	且	且
五十九 且	二三〇	且	且
六十 且	二二四	且	且
六十一 且	二一七	且	且
六十二 且	二一〇	且	且
六十三 且	二〇四	且	且
六十四 且	一九七	且	且
六十五 且	一九〇	且	且
六十六 且	一八四	且	且
六十七 且	一七七	且	且
六十八 且	一七〇	且	且
六十九 且	一六四	且	且
七十 且	一五七	且	且
七十一 且	一五〇	且	且
七十二 且	一四四	且	且
七十三 且	一三七	且	且
七十四 且	一三〇	且	且
七十五 且	一二四	且	且
七十六 且	一一七	且	且
七十七 且	一一〇	且	且
七十八 且	一〇四	且	且
七十九 且	九七	且	且
八十 且	九〇	且	且
八十一 且	八四	且	且
八十二 且	七七	且	且
八十三 且	七〇	且	且
八十四 且	六四	且	且
八十五 且	五七	且	且
八十六 且	五〇	且	且
八十七 且	四四	且	且
八十八 且	三七	且	且
八十九 且	三〇	且	且
九十 且	二四	且	且
九十一 且	一七	且	且
九十二 且	一〇	且	且
九十三 且	四	且	且
九十四 且	〇	且	且
九十五 且	〇	且	且
九十六 且	〇	且	且
九十七 且	〇	且	且
九十八 且	〇	且	且
九十九 且	〇	且	且
一百 且	〇	且	且



